市町村との調整や住民への対応大変な日々の連続

髙田（たかだ） 義宏（よしひろ）

福島県 企画調整部 避難地域復興局 次長

昭和38年（1963）、南相馬市鹿島区生まれ。
福島大学経済学部卒。1988年に福島県庁入庁。
震災当時、相双地方振興局からオフサイトセンターに派遣され、
現場における被災市町村との調整等に従事。

あの日、たどり着いた大熊町のオフサイトセンターは電源が落ちて真っ暗。
隣の原子力センターで災害対応が始まり、現地本部の住民安全班長として
避難の調整という大仕事が待っていました。すでに出ていた原発3㎞圏の
避難指示が翌日には10㎞圏、さらに1号機の水素爆発で20㎞圏内に拡大。
「これは大変なことが起きている」。
そもそも10㎞圏の地図しかなく、通信状況も悪くパニック状態でした。
その後、避難指示から法的拘束力を持つ警戒区域の設定。着のみ着のままで
避難していた住民からの強い要望に応えるため、必要な装備や線量管理、
交通手段などの一時立入りの調整と、大変な日々が続きました。
南相馬市鹿島区の実家も津波で流され、変わり果てた父と別れができたのは、
ようやく休みがとれた6月末のこと。みんな必死だったあの頃を思うと、
帰還困難区域を除いて少しずつ賑（にぎ）わいが戻っている姿に、正直ほっとしています。
ただ、復興はまだまだ道半ば、福島県は地震、津波の災害に加え、
原子力災害とそれに伴う風評という複合災害に全力で立ち向かっています。
まじめで我慢強い県民性を受け継ぎ、未来を担う人たちには
夢と希望と笑顔に満ちた「ふくしま」を築いていってほしいと思います。

福島県庁移転後のオフサイトセンター内の風景
（大熊町）